

戦後80年

いま伝えたい 戦争の記憶

昭和20(1945)年8月15日に太平洋戦争が終戦を迎えてから、令和7(2025)年8月で80年が経過しました。戦争を体験した人々が少なくなる中、その貴重な体験を次世代に引き継ぎ、平和の大切さを広く伝えるため、市民の皆さんから寄せられた戦争体験記を紹介します。

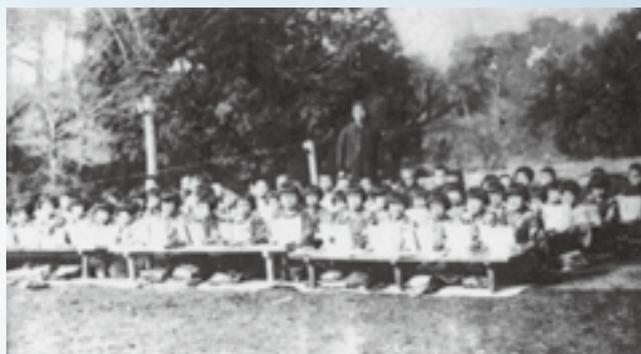
第20回 学校が燃えた日

あらい きよし
荒井 清さん 昭和10年生まれ

昭和20年2月16日、その日は快晴でした。私と弟は近所の友達と誘い合いながら元気よく八生国民学校(現在の八生小学校)に向かいました。私は3年生、弟は1年生。その頃は、敵機が飛んでくる恐れがあるため毎日のように警戒警報のサイレンが鳴り響いていました。しかし、それに慣れてしまっていたせいか、いつも通り校門をくぐりました。すると、先生が「今日は学校を休みにします!早く家に帰りなさい!」と大きな声で叫んでいました。仕方なく家に戻ることにしましたが、遊び盛りだった私たちはすぐに帰るはずもなく、学校から200メートルほど離れた諸岡君の家に立ち寄り、時がたつのも忘れて遊んでいました。

突如響いたサイレンと防空壕での恐怖

その時です。突然、けたたましいサイレンの音と半鐘の音が鳴り響きました。何が起きたのか分からず、ただただ戸惑っている私たちに「早くうちの防空壕に入りなさい!」と諸岡君のお母さんが大声で叫びました。急いで防空壕に飛び込むと、すぐに耳をつんざくような鋭い音が響き渡り、続いて体が持ち上げられるような感覚と同時に、体中に響く「ドーン」という大きな衝撃がありました。防空壕の中で震えながら体を寄せ合っていた私たち。その恐怖は、言葉では言い表せないものでした。やがて周囲が静まり返ったように感じた頃、仲間の中で一番やんちゃな常男君が恐る恐る防空壕から顔を出しました。そして、次の瞬間「大変だ!



八生国民学校の青空教室(昭和20年・『八生の百年』より)

学校が燃えている!と泣きながら叫んだのです。私たちも防空壕からはい出てみると、目の前には校舎が炎を上げて燃え盛っている恐ろしい光景が広がっていました。あまりの衝撃に、私たちは震えながらその場に立ち尽くしました。

その頃、助産師として働いていた私の母は、校長先生が住んでいる学校近くの宿舎で、数日前に産まれた赤ちゃんの沐浴を手伝っていました。学校が燃えているのを目にした母は急いで家に戻りましたが、私たちはまだ帰宅していませんでした。母は心当たりを探し回り、ようやく私たちを見つけると泣きながら強く抱き締めてくれました。

後になって知ったことですが、あの時の衝撃は、米国の戦闘機グラマンが日本の戦闘機との空中戦の末に操縦不能となり、私たちが潜っていた防空壕からわずか50メートル先の畑に墜落したためでした。その後、機体は畑でバウンドして飛び上がり、そのまま校舎に激突したのです。

もし、あの朝、先生の適切な判断がなかったら私たちは校舎にいて命を落としていたかもしれません。今でもその考えが頭をよぎると、体が震えるような思いがします。

私たちが経験したようなつらく、悲しく、恐ろしい出来事を二度とさせてはなりません。戦争のない平和な世の中がいつまでも続いてほしい。そして、今この瞬間の平和と幸せを、どうか大切にしてほしいと心から願っています。

「いま伝えたい 戦争の記憶」は今回をもって連載を終了します。ご愛読ありがとうございました。

市では、引き続き市民の皆さんから戦争体験記を募集しています。くわしくは市ホームページまたは文化国際課(☎20-1534)へ。



令和8年3月15日号 No.1551



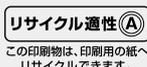
成田市のホームページ
<https://www.city.narita.chiba.jp>

*QRコードは株式会社デンソーウェーブの登録商標です

*本紙は3月5日時点の情報を掲載しています。最新情報は各ページの問い合わせ先や市ホームページで確認してください。

編集後記

東日本大震災から15年がたちました。当時、外出先で大地震に遭遇した私。情報を得ようと携帯電話のワンセグでテレビのニュースを周りの人と見ていたことを思い出します。遠くの駅まで歩き、いくつもの路線を乗り継いで、帰宅したのは翌日のこと。それ以来、食べ物や懐中電灯、地図などを持ち歩くようになりました。6ページでは「災害発生時の心得」を掲載しています。いざという時のためにぜひ参考にしてみてください。



広報なりたは、グリーン購入法に基づく基本方針の判断基準を満たす用紙、誰にでも読みやすいUD(ユニバーサルデザイン)フォントを使用しています。